

東京国立近代美術館と連携したオンライン授業を行いました！

12月3日(木)6時間目と12月7日(月)の6時間目の2回にわたり、東京国立近代美術館と母島中学校美術室をオンラインでつないで、中学校3学年そろって、合同授業をしました。学年の垣根を越えて、みんなで作品をみることで、自分では思いもよらない見方や考え方を発見し、みんなで共有することができました。

12月3日(木)6時間目 「比べる鑑賞 一構図や描き方に着目して」



国立美術館の鑑賞素材BOXを活用して古賀春江の《海》とポール・シニャックの《サン＝トロペの港》を鑑賞しました。

まずは、それぞれじっくり作品を鑑賞しながら、形、色彩、光、イメージの整理をしました。

次に、2枚の絵を見比べながら、構図や描き方の違いについて気付いたことや考えたことをグループや全体で共有し、見方や感じ方を深めていきました。

12月7日(月)6時間目 「東京国立近代美術館を散歩してみよう!」

前回の振り返りをしながら、「作者はどこかの海を描いているのか?」「どんなモチーフがあるのか?」など描かれた動機やモチーフ一つ一つに着目して鑑賞をしました。《海》では、私たちにとって身近な魚の種類についての激論(!?)が交わされました。

美術館散歩では、高村光太郎《手》で彫刻作品と出会ったり、おめめぱっちりて意外とかわいい原田直次郎《騎龍観音》の大きさに驚いたり、現在進行形で作品がつくられている場に出会ったり、高松次郎《No.273(影)》が本当のかげか絵なのかで盛り上がったりしました。



また、コロナ禍で休館していた世界中の美術館で広がった「#MuseumBouquet」にちなみ、花がモチーフになったコレクション室は、とても華やかで、いろいろな画材で作品がつけられていることが分かりました。油絵だけでなく、日本画にも触れることができました。

アントニー・ゴームリー《反映/思索》とイサム・ノグチ《門》の二つの彫刻作品をじっくり鑑賞し、立体表現の制作技法、空間との調和、作者の意図など、多様な視点で鑑賞が広がり、対話が生まれました。

最後の質問の時間には、「美術館のコレクション方法」「作品の購入方法」「作品の保管の仕方」など美術館の社会的な意義や文化の保存・展示について聞いてみたいことが出てきて、学芸員さんに答えてもらいました。

「美術館に行きたい!」「実際に作品を見てみたい!」と気持ちが高まったようです。修学旅行や内地への旅行の際に、機会があれば訪れ、作品を目の前にしてじっくり鑑賞したいですね。

